

『誘惑の果実』

著：弓月あや

ill：カワイチハル

千尋は素直に目の前の男性を、素(す)敵(てき)だと思った。

「きみの心はとてもびっくりして、怯えて、恐怖を感じて、震えている。そういう時はね、温かくて甘い飲みものを飲むんです。これが最良の薬になるんですよ」

とても神(しん)妙(みょう)に言うので、おかしくなって千尋がちいさく笑うと、青年も安心したように笑った。

「あ。甘くなくても大丈夫。好みに応じて、温かいお茶やホットミルクでも可です」

「可って……おかしいです」

くすくす笑いだした千尋を見て、にこやかに青年は頷いた。

「笑いましたね」

改めてカップを差し出され、手に握らされる。

「どうぞ」

「……ありがとう」

爽(さわ)やかな花の香りの紅茶を口にすると、いつの間にか強張っていた肩から、力が抜ける。つめたかった指先がじんわりと温まり、足首の痛みも徐々に鎮まっていくようだった。

部屋の中に飾られた淡いピンクの薔(ば)薇(ら)の香り。暖かい空気。静かに話す人を目の前に、心が落ち着いてくる。

これほど穏やかな時間は、千尋の家の中では考えられない。

家族に「妾の子」といつも蔑(さげす)まれているので、どんな目に遭(あ)っても特に心は揺れないと思い込んでいたが、人に言われて初めて心が解けていく。

———哀(かな)しい。

姉に罵(のの)しられ、偶発的にしろ、突き飛ばされ、階段から落ちた。

彼女は弟が階段から落ちたことに気づいていても、心配するどころか足早に逃げてしまった。

そうだ。これは哀しいことなんだ。

姉に見捨てられたのだから、自分は嘆(なげ)いてもいいのだ。

千尋が一人淋(さび)しい思いでいると、青年が疑問を投げかけてきた。

「そういえば先ほど階段のところで、どなたかと話をしていませんか？」

青年の突然の問いに、物思いに耽(ふけ)っていた千尋の表情が固まった。

「……いいえ」

「そうですか。女性の大きな声が聞こえたようでしたが……」

何度も首を横に振り、その言葉を否定する。

「いえ。ぼく一人でした。誰もいませんでした。一人で躓(つまず)いて階段から落ちてしまって……本当にありがとうございました」

姉のことは言えない。反射的にそう考えてしまった。

この人に知られたくない。……いや、この人にだけは、知られてはいけないと思った。

いつの間にか無意識のうちに、縫(すが)る眼差しを青年に向けていたことを、千尋は気づいていなかった。

この美しい青年に、これ以上自分の惨(みじ)めな境(きょう)遇(ぐう)を知られたくなかったのだ。

「では、あそこを通りかかって、本当に良かったですね」

青年の言葉で我に返った。またしても、物思いに耽(た)ってしまっていたらしい。青年は千尋の稚(ち)拙(せつ)な誤(ご)魔(ま)化(か)しを解き明かすこともなく、カップに口をつけた。

「あ、あの、すみませんでした。助けていただいた上に、こんな丁(てい)寧(ねい)な手当てまで……。それにせつかくのパーティーも中座させてしまって。今からでも戻りましょう」

「ちょうど人波に疲(つか)れていたし、静かな部屋に戻(かえ)れて私はありがたいですよ」

千尋の詫(わ)びに、安心させるように青年は頷(うなづ)いた。その品の良いクイーンズイングリッシュと落ち着いた声音は、心地よく耳を刺激する。

普段、自分には縁(ゆかり)のない人の温(ぬく)もりに触れた気がして、ほっとして微笑が漏れた。

「きみは笑顔が、とても素敵ですね」

「す、素敵って、そんな……」

欧米人は他人の良い点を褒(ほ)めてくれることが多い。でも、この青年に言われると、千尋は自分が特別な人間になったような、そんな錯(さつ)覚(かく)をしてしまう。

こんなの、ただの社(しゃ)交(こう)辞(じ)令(れい)なののに。

「ああ、まだ自己紹介もしていなかった。私はウォルター。ウォルター・スコットです」

「……ウォルター……」

美しい手を差し出され握手を交(か)わしてみると、随分と手の大きさが違うと気づく。美しいのにとっても頼(たの)りがいのある手なのだと、千尋はドキドキしている自分に苦笑して、かぶりを振った。

ときめいているなんて——……おかしい。ぼくは……おかしい。

「きみの名を伺(うかが)ってもいいですか？」

そうウォルターに問(と)われてハッとする。そういえば、自己紹介一つしていなかったことを、ようやく思い出す。

「し、失礼しました。桐江(とうえ)です。桐江(とうえ)千尋(ちゆん)と申(ま)します」

「桐江(とうえ)……このホテルと関(か)わりがおありの方(かた)ですか」

「はい。父(ちち)が経営(けいぎや)させていただいております」

察(さ)しのいい問いに頷(うなづ)くと、そうですか、と青年が微笑(わいご)んだ。

「素晴らしいホテルですね。内装(うちざう)、外装(がいざう)、どれをとっても趣味(しみ)がいい」

「ありがとうございます」

「お近づきになれて光栄(こうえい)ですよ。千尋(ちゆん)とお呼びしてもいいですか？」

「ええ、喜んで。ウォルターさんは、日本(にっぽん)によくいらっしゃるんですか？」

ウォルターに見つめられて、胸(むね)が高鳴(たか)ってしまう。ぎこちなく微笑(わいご)むと、包(か)み込むようにやさしい瞳(ひとみ)で見つめられた。

「本当は、今回の来日(らいにち)を渋(しぶ)っていたんですがね」

すこしの沈黙(しんもく)のあと、青年はそう笑った。

「気の進まない仕事があったし、今の時期、日本は寒いと聞いたから……」  
秀(しゅう)麗(れい)な容姿に似合わないかわいらしい理由に思わず笑ってしまうと、ウォルターもつられたように微笑んだ。  
「ひどいな、笑うなんて」  
「ごめんなさい、でも寒いから来日したくないって……」  
くすくす笑う千尋にウォルターも楽しそうだった。  
「でも、日本に来て良かった」  
「散りかけてはいますが、まだ桜の季節です。昼の桜は文句なく美しいですが、夜の桜は幻(げん)想(そう)的(てき)ですよ」  
「いえ、桜じゃなくて、私が言いたかったのは、きみのことです」  
ウォルターは目を細め、千尋の話す様を見つめていた。その沈黙に首を傾(かし)げると、「失礼」と軽く手を振る。  
「あんまりきみが可憐(これん)なので、つい見惚(おぼ)れました」  
「か、可憐(これん)って……」  
臆(おく)面(めん)もない言葉にきょとんとしていると、膝に置いていた手を取られた。  
「ウォルターさん……」  
「雪花石膏(せっかこう)の肌だ」  
そっと手の甲にくちづけられ、瞳(どう)目(もく)していると、ウォルターはうっとり微笑んだ。  
「本当に日本に来て良かった。異国の地で、こんな素敵な人に出逢えるなんて」  
熱く語られたが、突然の積極的すぎる態度に千尋はびっくりしてしまい、思わず体を引いてしまった。  
「ウォルターさん、あの……放(はな)してください」  
「ウォルターと呼んでください。千尋、きみはスノーホワイトのようですね」  
「え？」  
ウォルターはその美貌を微笑みで彩り、千尋の手の甲に再び唇を重ねた。電気を流されたように戦(おの)のくと、宥(なだ)めるように囁いてくる。  
「あ……あの、ウォルター？」  
「雪花石膏(せっかこう)のような白い肌、濡(ぬ)れ羽色(はねいろ)の漆黒(しつこく)の髪、そして黒曜石(くわいせき)の瞳を持つ姫君……」  
白雪姫。子供の頃に読んだきりの童話が千尋の中で甦(よみが)った。  
「スノーホワイトって、白雪姫の話じゃないですか。どうしてぼくがお姫様なんですか」  
千尋の問いにウォルターは悪戯(いたづら)っ子のように、肩を竦(すく)めて笑った。  
「その童話を母親に聞かせてもらった子供の頃、何て可憐(これん)で美しい少女なのだろうと、胸がときめきました。まさかこんなところで出逢えるなんて思いもしませんでした……」  
ちいさな苦笑に、千尋の鼓動(こどう)が跳ねる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>